

## 2018年度ユニーク卒論

人間福祉 学部

<p>担当教員名</p>	<p>藤井 美和</p>
<p>論文執筆者名</p>	<p>原 征吾</p>
<p>論文の題 (テーマ)</p>	<p>大学における留年生の“本当のところ” ～当事者へのインタビューの分析を通じて留年生の「生」をみつめる～</p>
<p>簡単な内容 (概要)</p>	<p>「怠けている」や「努力が足りない」と判断される留年生。ただ怠けているだけなのだろうか。本論文は当事者である筆者の思いからその“本当のところ”を明らかにした研究である。まず留年生の現状をデータから分析し、留年を説明する理論と留年の原因に関する実証研究をレビューしている。そして5人の留年経験者を対象としたインタビュー調査の質的分析から、留年生がそのプロセスにおいて抱えてきた思いとして、「入学直後からのつまづき～不本意入学・環境不適應～」「大学内における人間関係/出会い」「客観的留年観」「親の留年観」「主観的留年観～留年に意味を見出す～」「生命の危機」の6概念を抽出した。生きづらさを抱え、苦しみながら、人生における留年の意味を見出していく留年生の姿は、これまでの研究では明らかにされてこなかった。これらの結果から、留年生のサポートの1つとしてピアカウンセリングを提言し、その根拠を示している。</p>
<p>推薦の理由</p>	<p>本論文は、大学を留年した学生（留年生）の抱えるものを“本当のところ”として、その苦しみや生きづらさを明らかにし、これまで焦点が当てられてこなかった留年生の実際の姿を明らかにしようとしたものであり、独創的（ユニークな）研究である。</p> <p>2018年の大学進学率は53.3%と過去最高を記録した一方、留年率は5%を超え、大学4、5年生以上の自殺率は、他の学年に比べ高く、留年生と休学経験者の自殺率は突出している。これまでの留年生についての研究は、心理状態、経済的・環境的要因など、客観的原因を探る研究がほとんどであり、留年生自身が留年に至るプロセスについて内的世界を語る研究や、留年生として生きる自分自身の苦しみや生きづらさについて、当事者の言葉から分析する研究は見られない。</p> <p>留年生に焦点を当て、5人の留年経験者（既卒者、退学者、留年中）にインタビューを行い、入学当初の状況から大学に通わなくなったときの気持ち、そして留年に何らかの主観的意味を見出していく姿、そのプロセスでは生命の危機（死にたい）を抱えていることなどを明らかにした研究であり、留年生のナマの声（インタビュー）からこれまで見えていなかった“本当のところ”を分析した意義は大きい。インタビューは倫理的配慮の上実施され、分析も科学的手法に基づき丁寧に行われている。留年生へのサポートの提言は、今後の留年生へのアプローチの一助となるものであり、高く評価できる論文である。</p>